



# 君に届け

カラー版やバック  
ナンバーは「ホーム  
ページ」で検索

令和7年6月9日  
校長 菊川 靖浩  
熊本市西区小島8丁目 17-1  
TEL 329-2792  
FAX 329-2817

## <父が見ていたものは> 五十嵐大 著 PHP R6,11月号より

小学生の頃、父と一緒にしょっちゅう映画館へ足を運んでいた。夏休みや春休みといった長期休暇中、父は何度も映画館まで車を飛ばしてくれた。大好きだったのは映画「ドラえもん」シリーズで、毎年、新作が公開されるのが待ち遠しかった。

高学年になると、ハリウッドのアクション映画にも夢中になった。いまでも忘れられないのは「ジュラシックパーク」だ。図鑑でしか見たことがない恐竜たちが暴れまわる様子は、少年だった僕の心を鷲づかみにした。洋画を観るときは、必ず「吹替版」を選んでみた。字幕版だとセリフを読むのが追いつかなかったり、難しい漢字があると読めなかつたりする。字幕に必死になるあまり、キャラクターたちの動きを把握できなくなるのも嫌だった。そして、いつだって父は、隣に座って同じ映画を観てくれていた。



しかし、大人になった僕は、当時のことを思い出しては、自分の想像力のなさに打ちのめされてしまう。父は耳が聴こえない、ろう者だ。幼少期に聴力を失ったという。だから父は、耳からの情報を得ることが難しい。父と会話する際には、もちろん手話を使った。それだけではなく、筆談や口話、身振りなども交えて話す。でも、そこに「音」はなかった。

僕にとっては父の耳が聴こえないこと(ちなみに、母も聴こえない)も、手話で会話することも当たり前だったのに、映画を観るときには、なぜかそれが抜け落ちていた。いや、正確にいうならば、きっとあの頃の僕は、自分自身を優先していたのだろう。父も映画を楽しめるかどうかよりも、僕が思い切り映画を満喫できるかどうかを。だからいつも、「吹替版」を選んだのだ。

でも、そのことで父は一度も怒らなかつた。「字幕はわからなくなるから嫌だ。吹替がいい」そうやって駄々をこねる僕に対して、いつもうなずいてくれたのだ。父は一体、どんな気持ちだったのだろうか。息子と同じ映画を観ていても、内容が理解できないことで悲しかったのだろうか。それとも…。

いまだに父は元気になっていて、趣味の映画鑑賞を続けている。最近は邦画にも字幕がつけられる機会が少しずつ増えている。それがうれしいようだ。

そんな父に対して、あの時の気持ちだけは聞けずにいる。でも、これだけは実感している。どんな映画だろうと一緒に並んで観てくれていた父には、計り知れないほどの愛があったのだ、と。

今週末は父の日ですね。一般的に母の日よりも忘れられがちと言われることが多いですが、父親だって皆さんのことを大切に思っていると思います。今回の話のように、君たちを優先してくれていることがいくつもあるのではないのでしょうか？この機会に振り返ってみてください。

## <生徒総会・教生退任式・幼小中連携の日>

3日(火)は生徒総会と教育実習生の退任式が行われました(残念ながら、私は出張でしたので、今回は教頭先生に写真撮影をお願いしたものを掲載いたします)。また5日(木)の午後は幼保小中連携として、幼稚(保育)園、小学校の先生方が授業を見に来られました。授業前の昼休みに私が1年生教室に行くと、子どもたちが「久しぶりに小学校の先生に会える！」とうれしそうに話してくれました。

生徒総会の様子



幼小中連携の日の1-2の授業風景



小学校の先生との再会



